In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	『恋の骨折り損』の舞台裏
Author	杉井, 正史
Citation	人文研究. 57 巻, p.112-126.
Issue Date	2006-03
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学院文学研究科
Description	藪木榮夫教授 ： 広川禎秀教授 ： 阪口弘之教授 ： 小西嘉幸教授退任記念

Placed on: Osaka City University Repository

Osaka Metropolitan University

人文研究　大阪市立大学大学院文学研究科紀要
第57巻　2006年3月　112頁～126頁

『恋の骨折り損』の舞台裏

杉　井　正　史

シェイクスピアは全ての時代を通じて評価されうる文学者であるが、『恋の骨折り損』の場合、時事的言及が多く、その舞台背景を考えた方が理解が深まる。一般に言われているのは、「夜の学派」説というもので、シェイクスピアの保護者のエセックス、サウサンプトン・グループと対立するウォルター・ローリー・グループを揶揄するためにこの劇は書かれたというものである。本論文はこの説の妥当性を検証しながら、さらにその論証の強化を図ったものである。

具体的には、アーマードという登場人物と現実のローリーとの類似点、またローリー・グループの研究と劇での風刺との関係の検証を行い、ナヴァール王ファーディナンドという登場人物と現実の第五代ダービー伯爵（ファーディナンド・スタンリー）やナヴァール王アンリとの関係、文学者ジョージ・チャップマン、トマス・ナッシュ、ロバート・グリーンとシェイクスピアとの関係を探った。その結果、「夜の学派」説は大体正しく、このような劇の背景は、劇の文学作品としての普遍性を低めるものではない、と結論した。

He was not of an age, but for all time![1]

1623年の二折本全集の序文で、かようにベン・ジョンソンが称賛するようにシェイクスピアは全ての時代を通じて評価されうる詩人である。しかし、ある時代背景を考えた方が彼の劇がよく理解出来るのも事実である。シェイクスピアの初期の喜劇『恋の骨折り損』の場合も時代背景が重要である。旧ケンブリッジ版の編集者であったドーヴァ・ウィルソンが「この劇は初めから終わりまで、時事的な言及にあふれている」と指摘しているように、時事的言及が極めて多いからである。[2]『恋の骨折り損』という劇が、広い意味でいわゆる衒学的なものに対する風刺になっていることは明白である。劇の舞台はナヴァールになっている。当時の時代背景を考えれば、これがシェイクスピアのナヴァール王アンリ、後のフランス王アンリ四世に対する何らかの思いを表しているのは明白である。また無敵艦隊アルマダ（Armada）に由来すると思われるアーマード（Armado）と言われる登場人物が当時の実在の人物、シェイクスピアに敵対するグループに属する人物を当てこするためのものであるのは間違いない。こういった確実な事実を検証しながら、単なるモデル探しにならない範囲でこの劇の背景にあるものを探ってみたい。

1

シェイクスピアの喜劇『恋の骨折り損』は、ナヴァール王とその側近たちの学問のためと称する禁欲の誓い—飽食の禁止と女性への接近の禁止の誓い—で始まるが、それを含めて衒学的なものを風刺しているのは明白である。伝統的に指摘されているのは、エリザベス朝の廷臣ウォルター・ローリーのグループに対する風刺であるという説である。当時、ローリーはシェイクスピアのパトロンであったサウサンプトン伯爵ヘンリー・リズリーやエセックス伯爵ロバート・デヴルーのグループと女王の寵愛を巡って対立していたと言われている。ウォルター・ローリーを中心としたグループは「夜の学派」(School of Night) と呼ばれ、天文、創世紀の時代、不老不死の探求、魂の性格といった科学から哲学・宗教に亘る広い範囲の問題を論じ、そうした会はローリーの屋敷ダラム・ハウスで行われた。劇作家クリストファー・マーロウや数学者トマス・ハリオットもその仲間であった。ハリオットを、同時代の文学者トマス・ナッシュは「アダム以前の人間を証明しようとしている数学者」と呼んだ。[3] 彼らは「無神論者」の集まりと周囲からは見られ、調査を受けたこともあった。「夜の学派」という称号は、『恋の骨折り損』でのナヴァール王の次の台詞に由来している。

> O paradox! Black is the badge of hell,
> The hue of dungeons and the school of night;
> And beauty's crest becomes the heavens well (IV.iii.250-52)[4]

版によっては、"the school of night" と読まない場合もあり、「夜の学派」説を懐疑的に見る研究者もいる。

「夜の学派」の成員を考える場合に根拠とされるのは、シェイクスピアと同時代の文学者ジョージ・チャップマンの詩『夜の影』(*The Shadow of Night*) への献呈書簡である。それはM.C.ブラッドブルック[5]やF.A.イェイツ[6]といった批評家たちによって、この学派の宣言書と見なされている。この書簡は、チャップマンの親友のマシュウ・ロイドンという詩人に与えられたものである。

> しかし、次のことを思い出すと私の憂鬱は止る。親愛なるマシュウ (Mat) よ。すなわち、どれほど頻繁に君が私に報告したのか、もっとも頭のよいダービー (Darbie)、深い探究のノーサンバーランド (Northumberland)、そして術を持ったハンズドン (Hunsdon) の跡継が、有益にも学問を抱き、そのため凍るような学問を暖め、かれらの本当の貴族性が見事に輝き、そのすばらしい徳のために、今後は、私は暗黒から光を生み出し、その美しさの故に最も明るい陽でさえ羨むであろうということを。[7]

ここに挙げられている貴族は、第五代ダービー伯爵ファーディナンド・スタンリー (ストレンジ卿)、第九代ノーサンバーランド伯爵ヘンリー・パーシー、ジョージ・ケアリ (後のハンズ

ドン卿であり、シェイクスピアの劇団のパトロン）である。その他にも、グループには、ジョージ・チャップマン、クリストファ・マーロー、マシュウ・ロイドンなどの文学者もいたとされる。また数学者のトマス・ハリオットもいた。何人かの批評家の説によれば、今挙げた人々は親密なグループを形成し、エセックス—サウサンプトンのグループに敵対するグループを形成した。ローリー派のエドマンド・スペンサーの寓話『ハバードばあさんの話』の中に「宮廷に、武勲を好んで学問を邪魔する猿がいる」という記述があるが、[8] これはローリー派に対して、エセックス派が対立していたことを暗示しているのであろう。「夜の学派」説は、シェイクスピアはこのローリー・グループを風刺するために『恋の骨折り損』を作ったと見るのである。

2

「夜の学派」説は、ウォルター・ローリーは、劇の一人の登場人物、アーマードというスペインの奇人として風刺されていると考える。アーマードとモスはイタリア劇のコメディア・デル・アルテの範例—大ほら吹きと機転のきく召使—に合わせて創造され、アーマードのスピーチ・ヘッディングには「ほら吹き」(braggart) とある。禁欲を誓い合ったナヴァール王たちは、暇つぶしにこのスペインの奇人アーマードをからかって時間を潰すことを考えるのである。

Berowne . . .
But is there no quick recreation granted?
King Ay, that there is. Our court, you know, is haunted
With a refined traveller of Spain;
A man in all the world's new fashion planted,
That hath a mint of phrases in his brain;
One who the music of his own vain tongue
Doth ravish like enchanting harmony;
A man of complements, whom right and wrong
Have chose as umpire of their mutiny;
This child of fancy, that Armado hight,
For interim to our studies shall relate
In high-born words the worth of many a knight
From tawny Spain, lost in the world's debate.
How you delight, my lords, I know not, I;
But I protest I love to hear him lie,
And I will use him for my minstrelsy.
Berowne Armado is a most illustrious wight,
A man of fire-new words, fashion's own knight. (I.i.159-76)

アーマードは、王から "a refined traveller of Spain" と紹介される。Armado（アーマード）という名前が、当時の英国民にとっての憎悪の的であったスペインの無敵艦隊アルマダ

(Armada) に由来しているのは間違いない。アーマードはこのように王から「旅行者」と紹介されるし、自らもそう称する。"Armado, a soldier, a man of travel, that hath seen the world" (V.i.102-03)。ヴァージニア植民を計画し、ガイアナなどいくつかの海洋冒険、遠征の経験があるローリーなら「旅行者」と称されても不思議ではない。彼を尊敬したエドマンド・スペンサーは、牧歌『コリン・クラウト故郷に帰る』の中で、ローリーを「海の牧人」(The shepeard of the Ocean)[9] と呼んでいる。いずれにせよ、ローリーは旅行者の代表と見られていたのである。また上記引用の中で、アーマードは "A man of fire-new words" と言われるが、大げさで奇矯な表現はエリザベス女王を賛美した彼の『シンシア』(*The Poems to Cynthia*) という詩の特色であった。[10] また、女王の寵愛だけで出世した彼は "fashion's own knight" を自認していたであろう。エセックス派にとっては、ローリーに滑稽な役を与え、不倶戴天の敵スペインと結びつけ、何かにつけて劇の中で嘲笑するのは、愉快であったに違いない。

『恋の骨折り損』とローリーを決定的に結びつけるとされるのは、アーマードがジャッケネッタという田舎娘を孕ませたことが明らかになって、彼がナヴァール王や貴族たちの前で大恥をかくというエピソードである。ローリーの失脚の原因、恐らくエセックス・グループが最も嘲笑の種にしたかった事件は、1592年にローリーがエリザベス女王の女官エリザベス・スロックモートンを妊娠させて女王の怒りを買い失脚するという醜聞であった。この劇が書かれたのは1594年から95年頃であると言われている。劇の中では『九人の英雄伝』という野外劇の最中、田舎者コスタードから、ジャッケネッタの妊娠が告げられる。

Fellow Hector, she is gone; she is two months on her way (V.ii.666)

この子供の父親はアーマードだと暴露され、恥をかかされたヘクター役のアーマードとコスタードの間で決闘が起ころうとする。劇では、タイトル自体のlabour (出産) や "quick" などの妊娠の比喩によって、このエピソードは強調される。

現実の世界では、激怒したエリザベス女王のために、ローリーはスロックモートンと結婚させられ、この事件のためにロンドン塔に監禁されるのである。その風刺も劇にはあるように思われる。劇の中では、王の禁欲の法令を無視して淫乱な行為に耽っていたとされる平民のコスタードがアーマードの監視の下で監禁されることになる。しかし、アーマードは自分の恋文を届けさせる役割を負わすという利己的な理由でコスタードの監禁を解こうとする。この滑稽で馬鹿げた挿話の中で、監禁への言及が繰り返される。

Armado By my sweet soul, I mean setting thee at liberty, enfreedoming thy person: thou wert immured, restrained, captivated, bound (Ⅲ.i.125-27)

"liberty," "enfreedom," "immure," "restrain," "captivate," "bound" などの「監禁」

やその反対の「自由」への言及は、ロンドン搭に監禁されていたウォルター・ローリーへの風刺であると思われる。彼には自身の幽閉を嘆く『嘘』(The Lie)[11] という詩があった。この詩は1592年の彼の幽閉の時期に作られている。前述のように「夜の学派」の名称の根拠となった箇所でも「黒は地下牢の色である」と言われ、幽閉に言及されている。劇の大団円で王とビローンたち側近の貴族は、フランス王女が帰国してしまう前に愛が与えられることを請う。しかし、禁欲の誓いを破った前科のために信用されず、ナヴァール王はフランス王女から「この世のあらゆる快楽から遠く離れた、どこかの淋しい、がらんとした庵室においでになって下さい」(V.ii.787-89) と命令される。アーマードも田舎娘ジャッケネッタのために同じような生活を送ることを誓う。劇の最後における男たちの隠者の生活という屈辱が、ローリーの搭での監禁生活への風刺と見るのは穿ちすぎであろうか。ローリーには "Like to a Hermite poore in place obscure" で始まる詩がある。[12] もっともこれには贋作のおそれがあると言われている。

この劇の変人たちは、指を使っても正しく計算できない。そして、この無能さは、一度ならず風刺されている。アーマードは「1×3」の計算が出来ず、"I am ill at reckoning; it fitteth the spirit of a tapster" (I.ii.40-41) と言い訳するし、田舎者のコスタードは、野外劇の登場人物に関して、「3×3」の計算が出来ない。コスタードは "O Lord, sir! it were pity you should get your living by reckoning, sir" (V.ii.494-95)とビローンに反論する。これらの箇所が、一貫して観客によく知られていたある人物の数学の気取りについて冗談を言っているということは、明らかである。ローリーのグループには探検家兼数学者のトマス・ハリオットが所属していたのである。

「夜の学派」の別名が「無神論学派」であり、当時、科学的研究を行うローリーのグループが「無神論」の疑いで当局から目をつけられ、また調査を受けていたことは記録からうかがえる。リチャード・ベインズという男は、取り調べを受けた時「マーローは『モーゼは詐欺師だ。ローリーの仲間の男のハリオットも（モーゼと）同じことが出来る』と断言した」と供述した。劇でもアーマードと無神論が関係づけられている。フランス王女はアーマードを見て次のように言う。

Princess Doth this man serve God?
Berowne Why ask you?
Princess 'A speaks not like a man of God's making. (V.ii..521-23)

フランス王女の台詞は、無神論研究を行っていたとされるウォルター・ローリー派への当てこすりではないのか。

『恋の骨折り損』の中でフランス王女たちを慰めるために行われる野外劇『九人の英雄伝』において、アーマードはヘクターの役を与えられる。当時の政界では、ローリーとエセックス伯爵の対立はトロイ戦役の両陣営の英雄とヘクターとアキレスの対立に擬された。彼らは実際

決闘をしたこともあった。この配役は、恐らくは劇の最初の観客であったエセックス伯爵を喜ばすものであっただろう。野外劇でアーマードが入場してきた時、ビローンは“Hide thy head, Achilles: here comes Hector in arms”（V.ii.627-28）と叫ぶ。この台詞は、観客の中にアキレスに当たる人物、エセックス伯爵がいないと意味をなさない。劇が最初は仲間内の余興(コテリエ・プレイ)として上演されたことの証明となろう。

以上のように、劇の中でアーマードが「旅行者」と紹介されること、彼の妊娠のための屈辱、「監禁」や「計算」への言及などの根拠から、アーマードを実在の人物ローリーと結びつけることが出来ると思われる。

3

劇の登場人物を見て気づくことは、ナヴァール王の名前がアンリではなく、ファーディナンドになっていることである。1623年の二折本版での冒頭のトガキは“*Enter Ferdinand King of Nauarre, Berowne, Longauill, and Dumane*”となっている。[13] 1590年代にナヴァール王と言えば、ナヴァール王アンリ、後のフランス国王アンリ四世であった。しかも劇での王の側近ビローン、ロンガヴィル、デュメインは、それぞれ、アンリの側近あるいは敵対者であった人物を思い起こさせる。その点からしても、ナヴァール王でシェイクスピアが意図していたのがアンリであったことは疑いない。一方、この劇が書かれた当時1590年代に、ファーディナンドと言えば、ストレンジ卿、後のダービー伯爵ファーディナンド・スタンリー（Ferdinando Stanley）しか考えられなかった。このことはかなりの意味を持っている。ファーディナンド・スタンリーは、1589年1月28日にストレンジ卿として議会に呼ばれ、1593年9月25日に第五代ダービー伯爵として父を襲い、1594年4月16日に不可解な状況で死んだ。彼は非常に哲学的な能力のある人物であり、学芸を愛し、一説によればローリー・グループに属していたとも言われる。その証拠となるのが、上記のジョージ・チャップマンの詩『夜の影』における献呈書簡中の「もっとも頭のよいダービー」という下りである。

彼はダービー伯爵に就任する前にストレンジ卿であったが、彼に対する風刺と思える箇所も劇には存在する。

King Then in our measure do but vouchsafe one *change*.
Thou bidd'st me beg; this begging is not *strange*.
Ros. Play, music, then! nay, you must do it soon.
Not yet? - no dance:- thus *change* I like the moon.
King Will you not dance? How come you thus *estranged*?
Ros. You took the moon at full, but now she's *changed*.
King Yet still she is the moon, and I the man.
The music plays; vouchsafe some motion to it.

Ros. Our ears vouchsafe it.
King But your legs should do it.
Ros. Since you are *strangers*, and come here by chance (V.ii.209-18) *emphasis added*

ナヴァール王や男性貴族たちがフランス王女およびその侍女たちにダンスを申し込む場面である。そこには“strange”という語とそれを強調する脚韻“change”や“estrange”が現れる。ストレンジ卿との係わりを推測させる箇所である。

風刺家トマス・ナッシュは1592年8月8日に出版業組合登録簿に登録された彼の『文なしピアスの悪魔への嘆願』において

かの類いない名誉の鑑、徳の寛大な酬い手、ユピテル神の鷲に運ばれるガニミード、
まことに尊いアミンタス[14]

に言及している。エドマンド・スペンサーの牧歌『コリン・クラウト故郷に帰る』においても、スペンサーは「羊飼いの誇りの花、アミンタスは失われてしまった。生きていた時には、麦笛を吹く者の中で一番気高い人だったのに」と同じくアミンタスを回顧している。[15] アミンタスは牧歌に特有の名前であり、ほぼ確実にこのアミンタスは第五代ダービー伯爵ファーディナンド・スタンリーだと推測されている。鷲はスタンリー家の古い紋章であった。

『恋の骨折り損』の中で、ストレンジ卿はローリーのように痛烈に風刺されてはいない。シェイクスピアが、若い頃にストレンジ一座に所属していた可能性もあり、いわばかつてのパトロンであった。第五代ダービー伯爵は、リチャード・ヘスキスというカトリック教徒に王位の継承者になることを勧められたが、これを裏切り、そのためヘスキスは処刑された。そして伯爵自身も間もなく世を去った。カトリック教徒の毒薬か魔法がその死因だと噂された。こういった訳でシェイクスピアにとっても伯爵をある程度当てこする余地もあったと思われる。[16]

4

1594年に刊行されたジョージ・チャップマンの『夜の影』は、ローリー一派の宣言書であると言われている。『恋の骨折り損』にはこの書やチャップマンへの言及が見られる。チャップマンの『夜の影』は難解な詩であるが、要するに、夜の属性を学問に結びつけて讃えた詩である。この詩は、まず「夜の気質」、悲しく泣くような、しかし難解な学問に没頭する気質を描写する。それから夜の深い思索が、愚かで無意味な昼の活動と対照される。こういう経験は、最終的には「夜」の闇の中から魔術的壮麗さを以て立ち上がってくる「月」の理想像に至る。この詩は『夜の賛歌』と『月の賛歌』の二部から成り立つ。チャップマンにとっては、「昼」の騒々しい活動とは正反対に学問に相応しい静けさを保ち、下品な活動とは反対の汚れなき瞑想的なヴィジョンを持った「夜」の信奉者は、また徳の信奉者であり、「化粧した光」の「迷

信」を退けるのである。「夜」、「月」の賛美の裏には、月の女神「シンシア」と呼ばれたエリザベス一世への賛美がある。『恋の骨折り損』にある、いささか滑稽めいた「憂鬱」や「暗黒」への言及、また「顔の黒い恋人」への言及は、このような「夜の思索」を信奉し、「憂鬱」を賛美するチャップマンへの風刺と見なされる。[37]

1598年のシェイクスピアの『恋の骨折り損』の四折本の末尾には "The words of Mercury are harsh after the songs of Apollo" と意味不明とも思える詩行がついている。アーマードの台詞とされることがあるが、確固たる根拠があるわけではない。これも「夜の学派」やチャップマンと結びつけて考えることが出来る。その学派の信奉者たちは、中世の思想の安定を次第にゆるがしていた科学に対して、珍しい熱意を抱いていた。天文学、数学、錬金術であり、それは懐疑的な精神に興味を与え始めていたが、その一方で、彼らには哲学的な傾向の精神があり、彼らはある種のストイシズム、新プラトン主義の称賛者であった。プラトニズムは、歴史的には15世紀の有名なフローレンスの学院に遡るものであり、「夜の学派」は、その継承者であると見なされるかもしれない。

例えば、チャップマンはマルシリオ・フィッチノによるプラトンの『対話編』についての論評をよく知っていた。そして、彼の学派はフィッチノと同じく、錬金術の教え（ヘルメスの教え）への愛好を持っていた。というのは、1590年代初期のチャップマンの著作の中において、ヘルメスへの依拠がしばしば引用されているからである。その学派の何人かが影響を受けていた錬金術の学説の型を決めることは困難である。しかし、錬金術の学説は、基本的に「物質は諸悪の根源であり、錬金術は人間を肉体の隷属状態から解放することが出来る」と説く。この点で『恋の骨折り損』の冒頭のナヴァール王の思想は、ヘルメス（ローマ神メルクリウス Mercury）の教えと近い。冒頭でナヴァールの四人の貴族たちは人間社会の混沌から引退し、静寂、隠遁、書物の学問という隔離された世界に入ることを誓う。劇の中で、智恵の理想を追求しながら、ナヴァール王と彼の臣下の貴族たちはメルクリウス（ヘルメス）の保護下に入ったと言える。メルクリウスは、「人間の理性と孤独な思考の保護者」と見なされていたからである。しかし、劇の筋から見ると、彼らの禁欲・精進が風刺的に見られているのは明らかである。また、劇の恋の詩の中に、これらの主義への反応と思われるものもある。こういった意味で、『恋の骨折り損』は、チャップマンの思想への詩人シェイクスピアの反応と解釈出来る。劇の最後の句 "The words of Mercury are harsh after the songs of Apollo" も、劇中での位置づけは不明だが、これがシェイクスピアのヘルメス主義へのメッセージであるのは間違いない。シェイクスピアがヘルメスの智恵とアポロの詩を対比して考えていたことは、彼の詩集『ヴィーナスとアドニス』の冒頭の句からも推測出来る。

Vilia miretur vulgus: mihi flavus Apollo
Pocula Castalia plena ministret aqua.

俗悪な智恵は俗悪な物を賛美せよ。
うるわしい太陽神は私を詩神の泉へと導け。

ジョージ・チャップマンとシェイクスピアは、さらに現実世界でややこしい関係にあった。シェイクスピアの『ソネット集』における敵対詩人とはチャップマンであると言われている。チャップマンは、エセックス－サウサンプトン一派と完全に対立していたのではない。彼は、自らの『イリアッド』の翻訳をサウサンプトン伯爵に献じている。保護を巡って、二人は競争者の関係にあったのである。

Beauty is bought by judgment of the eye,
Not utter'd by base sale of *chapmen's* tongues. (Ⅱ.ii.15-16) *emphasis added*

劇の中のこのような台詞も、チャップマンへの当てこすりとは見られないであろうか。

5

以上、「夜の学派」と呼ばれる人間たちに対する劇の風刺の要素を考察してきた。以下は、その学派以外の、当時の実在の人間や状況と劇との関係についての考察である。

劇の舞台となっているフランスの当時の状況も考察に値する。ナヴァール王の名前は、ファーディナンドではあるけれど、1590年代にナヴァール王と言えば、ナヴァール王アンリ、後のアンリ四世であった。劇での王の側近、ビローン、ロンガヴィル、デュメインは、前述のように、それぞれアンリの側近、あるいは敵対者であった。この喜劇の中心人物であるビローンは、フランスの戦争での有名な指導者ビロン将軍にちなんで名付けられた。彼は、1592年7月頃に死んだ。その息子シャルル・ド・ゴントは、父よりも偉大な軍事的才能を所有し、最高の名誉が彼に対して与えられた、しかし、彼は後に主人アンリに反乱を企て、死刑を宣告される。息子は、ジョージ・チャップマンの劇『バイロン公チャールズの悲劇』(*Tragedy of Charles, Duke of Byron*) にバイロンとして登場する。ビロン将軍が戦う戦争は、明らかにエリザベス朝人たちによって注目された、というのは、1591年と1592年に、ビロン将軍は、エセックス伯爵と共同でしばしば戦ったからである。フランス王位を巡る戦争におけるナヴァール王アンリに対するもう一人の支持者は、アンリ・ド・オルレアン、つまりロングヴィユ公爵 (Duc de Longueville) であった。彼は1595年に死亡するが、彼の名前はこの劇にロンガヴィル (Longaville) として現れている。しかし、この劇のデュメイン (Dumain) は、その名前をアンリの大いなる敵、メイエンヌ公爵、シャルル・ド・ロレイン (Charles de Lorraine) から得ている。この人物は、1588年12月23日の兄アンリ・ド・ギーズ (Henri de Guise) の死後、カトリック同盟の代表者であった。劇の登場人物と宗教戦争におけるフランス軍の指導者たちとの名前の一致は、「シェイクスピアが、当時のフランスの歴史に関心を持っていた」こ

とを示す。

劇のナヴァール王の盟友たちが、歴史的に王と関係のあったビロン公、マイエンヌ公、ロングヴィユ公を思わせる人物であるということは意味を持つ。彼らは王位継承戦争や宗教戦争を戦っていた。ナヴァール王アンリのユグノー陣営は、英国にとっては味方であるが、外国人嫌いの伝統から言うと、フランスの内戦は滑稽で風刺の対象であったに違いない。

. . . .
And make us *heirs* of all eternity.
Therefore, brave *conquerors* - for so you are,
That *war* against your own affections
And the huge *army* of the world's desires - (I.i.7-10) *emphasis added*

これは、劇冒頭で禁欲を説く王の台詞である。"heirs," "conquerors," "war," "army" といった語は比喩であるが、そこには風刺がある。その場所が王位継承戦争の行われていたフランスであるからだ。ナヴァール王アンリは、フランス王アンリ三世によって後継者に指名され、カトリック同盟がそれに対立していたのである。シェイクスピアによる同年代の作品『間違いの喜劇』にも、隣国の戦争への言及はある。ナヴァール王アンリへのカトリック同盟の反抗は、"In her forehead, armed and reverted, making war against her heir" (Ⅲ.ii.123-24) と紹介されている。また、その他の『恋の骨折り損』の台詞の中にもフランスの内乱への言及と思われるものがある。「愛の軍隊の武将」(affection's men-at-arms) (Ⅳ.iii.286)、「この機知の内乱」(This civil war of wits) (Ⅱ.i.225)、「唯一の後継者」(the sole inheritor) (Ⅱ.i.5)、「フランスの争乱 (踊り)」 "a French brawl" (Ⅲ.i.8-9) などである。

カトリック同盟は、新教徒であるユグノーと宗教戦争を戦っていた訳だが、劇中で禁欲の文脈で出てくる「誓いの仲間」 "vow-fellows" (Ⅱ. i .38) や「誓いの仲間」 "competitors in oath" (Ⅱ.i.82) なども、この宗教戦争を想起させる。劇中のナヴァール王や貴族たちの禁欲が特に宗教的な比喩で表現されるのは、それによってフランスの宗教戦争を当てこする意図があるからだ。劇では何度も「誓い」に言及されるが、宗教による風刺の色合いは、ナヴァール王の偽誓という現実の事件によってさらに強められる。アンリは、フランスにおける新教の代表的擁護者であった。しかし彼はまた変節でも有名であった。彼とマルグリート・ド・ヴァロアとの結婚の直後に起こったカトリック側の陰謀によるサン・バルテルミーの虐殺、それに続く数年にわたる幽閉。生き残るためにアンリはカトリックに改宗する。さらに、国家を統一するためにカトリックへの信仰を宣言して1593年フランス王に即位する。本人にとってはやむを得ない選択であっても、他国の人間にとっては風刺の的となったであろう。劇の王たちの禁欲の誓いは、フランス王女の訪問によって潰える。男たちは、恋人の登場によって偽誓を余儀なくされる。これらの偽誓の背景には、現実のアンリの偽誓がある。フランス王女は "O heresy in fair, fit for these days!" (Ⅳ.i.22) と叫ぶが、 "fit for these days" は、ナヴァール王

アンリの偽誓を暗示している。劇には、フランスだけではなく、スペイン、ロシアに対する外国人嫌悪の感情も流れている。

ナヴァール王は、その好色さでも知られていた。マルグリートとの結婚は、その母カトリーヌ・ド・メディチの策略によるものであり、双方とも相手に貞節を誓うというものではなかった。そして、結婚は結局破綻に終わる。特に夫の方の浮気は有名であった。劇のナヴァール王の禁欲の誓いにも彼の好色に対する当てこすりがあるのだろう。アンリは、アンリ三世の死亡によって、サリカ法の規定によりフランス王の位につく。劇でもフランス王の死が伝えられる。ここにもアンリへの風刺がある。劇では逆にナヴァール王は隠遁生活を送ることになる。

フランスの国内状況と劇との類似は政治の分野だけではない。学問的なことにおいても劇はフランス国内の事情を反映している。劇の冒頭でナヴァール王は、「宮廷を学問に精進する学園にしよう」(Navarre shall be the wonder of the world; / Our court shall be a little academe) (I.i.12-13) と提案するが、現実のナヴァールにもアカデミー（学院）が存在したのである。アテネのプラトンのアカデミアの伝統は、新プラトン主義の神秘思想を通じて宗教と哲学の融合という中世の理想を追求した。その伝統はメディチ家のフローレンスのアカデミーから、シャルル九世とアンリ三世のフランスに伝わった。フランスでは宮廷アカデミーが創設されたのである。またナヴァールのプロテスタントの宮廷にも真似てアカデミーが作られた。アグリッパ・ドービニェ は「我が主たる王（アンリ・ド・ナヴァール）は宮廷のアカデミーを真似て小さなアカデミーを作っておられました」と述べている。[18] さらにナヴァールのアカデミーについての証拠は、ピエール・ド・プリモーディの著書『アカデミー・フランセーズ』である。それは、小さな私的アカデミーを創設して、両親たちの面前で討論をしたアンジューの四人の青年たちの会話を伝えたものであると言われている。四人の青年のアカデミーというのは、『恋の骨折り損』と同じ状況である。とにかく、ナヴァールにも一種のアカデミーが存在し、それがアンリ・ド・ナヴァールと関連していたことは事実なのである。ラ・プリモーディの書物は英国で大反響をみ、英語に翻訳されていた。

以上のように、『恋の骨折り損』には、隣国フランスの政治や宗教に対する当てこすりが多数見られるのである。

6

劇の背景として重要な意味を持つのは、シェイクスピアの同時代の作家ロバート・グリーンとトマス・ナッシュらへの思いである。彼らがローリー一派とどういうつながりを持っていたのかは定かではない。彼らは「夜の学派」のグループとは強い関係はなかったであろう。しかし、上述のようにナッシュは、自分の作品の中で第五代ダービー伯爵を賞賛しているので、多少の関係はあったかも知れない。ナッシュには、『夜の恐怖』という作品があった。劇の変人

アーマードには、ローリーの陰があるが、またグリーンへの風刺もある。ロバート・グリーンが死の直前に書いた、半自伝的作品『百万の悔恨をもって贖われたる一文の智恵』の中でシェイクスピアを罵る有名な句がある。

> 我々の羽根で着飾った成上がり者の烏めがいおって、「俳優の皮で虎の心臓を包み」、君たちの一番優れたものに劣らず無韻詩を怒鳴りちらせるものと思っている。また、無上のよろず屋だから国中唯一、舞台を震撼させることの出来る者（Shake-scene）だと自惚れている。[19]

「俳優の皮で虎の心臓を包み」は、シェイクスピアの『ヘンリー六世第一部』の台詞のもじりである。またShake-sceneはシェイクピアの名前の暗示である。この文は、明らかにマーローと思われる「悲劇作家の華として名も高い君」と、おそらくはトマス・ナッシュと思われる毒舌の風刺家「若きユウェナリス」に呼びかけ、また警告している。風刺の対象にされたシェイクスピアが彼らに好感を持っていたはずはない。『恋の骨折り損』にはグリーンやナッシュへの風刺も明らかにうかがえる。エリザベス朝の三部作劇『パルナッソスへの巡礼』、『パルナッソスからの帰還第一部』、『パルナッソスからの帰還第二部』は、15世紀末から16世紀初めにケンブリッジ大学の学生によって演じられた劇だが、そこでナッシュはインジェニオーソ（Ingenioso）という人物として紹介されている。『恋の骨折り損』では、アーマードとその弟子モスの会話で、モスは“tender juvenal”と呼びかけられている。

> *Armado* How canst thou part sadness and melancholy, my tender juvenal?
> *Moth* By a familiar demonstration of the working, my tough Signor.
> *Armado* Why tough Signor? why tough Signor?
> *Moth* Why tender juvenal? why tender juvenal?
> *Armado* I spoke it, tender juvenal, as a congruent epitheton appertaining to thy young days, which we may nominate tender.
> *Moth* And I, tough Signor, as an appertinent title to your old time, which we may name tough. (I.ii.7-17)

“juvenal”は「若さ」を表し、ローマの風刺詩人ユウェナリスとの洒落であり、“Signor”はseniorとの関連から「老年」を暗示する。“tough”も同様に「老年」を暗示する。そもそもMothという名前自体がトマス・ナッシュのThomasのアナグラムである。さらに、“tender”という形容詞も洒落になっている。Nesheは、Nasheという姓の一つの綴り方であるが、その当時neshあるいはnashという形容詞は「柔らかい（tender）」という意味であった。それゆえ“tender”はナッシュを暗示するのである。さらにこの後には、アーマードの“What! that an eel is ingenious?”（27）という台詞が続くが、パルナッソス劇の中でナッシュはIngeniosoと呼ばれていた。

グリーンへのもっと分かりやすい暗示もある。

Armado Tell me precisely of what complexion.
Moth Of the sea-water green, sir.
Armado Is that one of the four complexions?
Moth As I have read, sir; and the best of them too.
Armado Green indeed is the colour of lovers; but to have a love of that colour, methinks, Samson had small reason for it. He surely affected her for her wit.
Moth It was so, sir, for she had a green wit. (II.i.80-87)

ここの会話の主題は「恋の憂鬱」だが、「緑色」の強調は明らかにグリーン（Greene）に関係していると思われる。シェイクスピア当時、ナッシュはマーティン・マープレリト論争と呼ばれる宗教論争やそれに続くゲイブリエル・ハーヴェイとの泥仕合の論争でその毒舌が知られていた。『恋の骨折り損』にも、その断片が見られる。

Armado How hast thou purchased this experience?
Moth By my penny of observation. (III.i.25-26)

Costard. . . thou halfpenny purse of wit, thou pigeon-egg of discretion(V.i.68-69)

ナッシュは自らの本のタイトルにpierce pennilessを使っているし、彼の論敵ゲイブリエル・ハーヴェイはナッシュをPenniworth of Discretionと呼んでいる。pierce pennilessとdiscretionなどはその論争での常套句であった。シェイクスピアを「成り上がり者の烏め」と罵ったロバート・グリーンの弟分のナッシュは、シェイクスピアにとって格好の風刺対象であった。劇中で、衒学癖の学校教師ホロファーニーズが提示するラテン語 "*Facile precor gelida quando pecus omne sub umbra Ruminat*" (IV.ii.94-95) は、最低の文法学校教師でも知っている句であり、ナッシュの機知のなさを攻撃するのにハーヴェイが使用した句である。またナッシュは第五代ダービー伯爵ファーディナンド・スタンリーにつながる人物であったと推測される。前述のように、彼は『文なしピアスの悪魔への嘆願』で伯爵に言及しているからである。このように、劇にはシェイクスピアにとって不快と思われた文学者グリーンやナッシュへの風刺がかなり散らばっているのである。

結　論

前述のように、フランス王女たちを慰めるために行われる野外劇『九人の英雄伝』において、ヘクター役のアーマードが入場してきた時、ビローンは "Hide thy head, Achilles: here comes Hector in arms" (V.ii.627-28) と叫ぶ。当時の政界では、ローリーとエセックス伯爵の対立はトロイ戦役の両陣営の英雄ヘクターとアキレスの対立に擬された。したがって、観客の中にアキレスに相当する人物、恐らくはエセックス伯爵がいたと推測される。この場面は、

劇が最初、仲間内の余興から起こったことを示している。また、このような背後の事情を考慮に入れておかないと味わえない箇所である。さらに変人たちの計算能力欠如や台詞の中でgreenやstrangeが強調される事情も同様である。

一般に芸術作品を評価する場合、その作品が普遍性を持つかどうかで評価される。この基準に照らせば、ある時代状況、あるグループ内だけでしか理解できないような要素は作品の価値を高めるものではなく、むしろ夾雑物である。芸術的有機性を害するものである。しかし、シェイクスピアの場合、夾雑物とも言えないところもある。『恋の骨折り損』という劇を観た時に面白いのは、貴族たちの気取り、変人たちの大げさな言葉使いや衒学癖である。また、しみじみと感じるのは、滑稽さの後に起こる大団円のある種のむなしさやペーソスである。それは、人間が自然の大きなリズムの中にあるという認識である。[20] 近年のロンドンの上演で、冒頭に戦闘場面が設定され、舞台を大戦中のヨーロッパに置くことがあるが、それも決して的はずれな演出ではない。劇の背景にエセックス派とローリー派の対決があり、ジェッケネッタの妊娠にエリザベス女王の女官の妊娠の背景があることを知ることは、劇の滑稽さを減少させない。むしろ興味と現実感を与える。また、ペーソスを害するものでもない。劇の背景を明らかにすることは、決してむなしい努力とは思えない。第四幕第三場では、女性の目の力、愛の力についての長々としたビローンの台詞が続く。恐らくは「何か」への言及や当てこすりがあると思われるが、この「何か」を明らかにすることは、劇の鑑賞に大いに資することになると思われる。仲間内の冗談や楽屋落ちと自然の大きなリズムは矛盾しないのである。

【注】

1) Doug Moston, *introd., Mr. William Shakespeares Comedies, Histories, & Tragedies: A facsimile of the First Folio, 1623* (London: Routledge, 1998) p.10.

2) Arthur Quiller-Couch & Dover Wilson, eds., *Love's Labour's Lost*, The Cambridge Shakespeare (Cambridge: Cambridge University Press, 1962) *Introduction* xxxiv.

3) トマス・ナッシュ（北川悌二、多田幸蔵訳)、『文なしピアスが悪魔への嘆願』（東京：北星堂、1970年)

4) シェイクスピアの作品の引用は、断りのない限りRichard Proudfoot, *et al*, eds., *The Arden Shakespeare Complete Works / William Shakespeare* (Surrey: Thomas Nelson, 1998) による。

5) M.C.Bradbrook, *The School of Night: A Study in the Literary Relationships of Sir Walter Ralegh* (New York: Russell & Russell, 1965).

6) Frances Yates, *A Study of "Love's Labour's Lost"* (London: Cambridge University Press, 1936).

7) W.Schrickx, *Shakespeare's Early Contemporaries: The Background of the Harvey-Nashe Polemic and "Love's Labour's Lost"* (Antwerp, 1956, *rpt*, New York: AMS, 1972) p.27.

8) Edwin Greenlaw *et al*, eds., *The Works of Edmund Spenser* (Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1943) Vol.8, p.127.

9) Greenlaw, *Ibid.*, Vol. 7, p.150.

10) Walter Oakeshott, *The Queen and the Poet* (London: Faber, 1960) pp.146-219.

11) Agnes Latham, ed., *The Poems of Sir Walter Ralegh* (Cambridge: Harvard University Press, 1962) pp.45-47.
12) Latham, *Ibid.*, p.11.
13) Doug Moston, *op.cit.*, p.140.
14) 前掲書、ナッシュ、p.184.
15) Greenlaw, *op.cit.*, Vol.7, p.160. 訳は、エドマンド・スペンサー（熊本大学スペンサー研究会訳）、『スペンサー小曲集』（東京：文理、1970年）p.27を使用。
16) シェイクスピアとダービー伯爵とカトリックの関係については、Richard Dutton *et al*, eds, *Region, religion and patronage: Lancastrian Shakespeare* (Manchester & New York: Manchester University Press, 2003)、Richard Wilson, *Secret Shakespeare: Studies in theatre, religion and resistance* (Manchester & New York: Manchester University Press, 2004)、Anna Swaedh, *Rape and Religion in English Renaissance in Literature: A Topical Study of Four Texts by Shakespeare, Drayton, and Middleton* (Uppsala: Uppsala University Press, 2003) およびDennis Taylor & David Beauregard eds., *Shakespeare and the Culture of Christianity in Early Modern England* (New York: Fordham University Press, 2003) を参照。
17) ジョージ・チャップマンについては、フランセス・イエイツ（内藤健二訳）『魔術的ルネッサンス』（東京: 晶文社、1984）およびArthur Acheson, *Shakespeare and the Rival Poet* (London: John Lane, 1903) を参照。
18) Frances Yates, *The French Academies of the Sixteenth Century* (London & New York: Routledge, 1988) p.123.
19) Schrickx, *op.cit.*, pp.22-23.
20)『恋の骨折り損』の中に感じられる「生の力」については、拙論、「『恋の骨折り損』と生のエネルギー—機知と陣痛—」『人文研究』第55巻第5分冊（大阪市立大学文学研究科、2004）pp.1-12を参照。

【2005年9月16日受付，10月14日受理】